

# Beyond the Legend of Makiguchi

Kazuyuki Uefuji

Tunesaburou Makiguchi, the founding president of Soka Kyōiku Gakkai, the predecessor of Soka Gakkai, became a legend in his birthplace of Arahama, a village in Japan's present-day Niigata Prefecture.

He once traveled to Japan's northernmost main island of Hokkaido to find his father. At that time, he suddenly heard gunshots echo as he discovered that his younger sister had been killed. The criminal was a government official who was shooting bears.

This account was dismissed as a rumor until recently, but I learned that his nephew who lived in Otaru, Hokkaido, was also shot and killed by another government official in 1889.

Reviewing these incidences together reveals that the oral history of Makiguchi's fellow villagers includes important facts.

# 牧口伝説のかなたに見えるもの

上 藤 和 之

## 1、はじめに

牧口常三郎は1871年（明治4年）、新潟県荊羽郡荒浜村（現在の新潟県柏崎市荒浜）に生まれたが、同村出身者として初めて北海道師範学校を卒業、その著『人生地理学』、『創価教育学体系』など数々の著書刊行、「創価教育学会」の創設と拡大により、その生誕の地・荒浜においては郷土の偉人となった。しかし、幼少期から北海道師範学校に入るまでの歴史・記録は一切残ってない。

その時期の姿は、荒浜関係者によって近年まで語り伝えられた伝説にたよるしかない。伝説とは一般に「特定の人物や事物をめぐる語り伝えられ、かつてその事実が本当に起こったと信じられているもの。言い伝え」（『三省堂スーパー大辞林』CD-ROM カラー版、1996年）とされる。そうした伝説が数多く荒浜周辺に残っている。

その伝説について初めて本格的に研究したのが牧口研究の第一人者と言われる斎藤正二の『若き牧口常三郎 上』（第三文明社刊）であった。続いて創価教育研究所の塩原将行などの研究者が発表した諸論文、さらに近年の『評伝 牧口常三郎～創価教育の源流 第1部』<sup>1)</sup>によって実像に迫る試みがされている。

こうした諸研究を批判的に見直し、新しく見つけた資料をもとに牧口の幼少期、小学校時代、北海道渡航時、北海道師範学校入学までの姿に迫ってみたい。

## 2、幼少期の牧口に関する伝説の検証

はじめに、幼少期の牧口について、実父の行方不明と両親の離婚、母との関係に関する伝説について検証する。牧口にかかわる荒浜に伝わる伝説は決して華やかなものではなかった。牧口が3歳のころ、北海道に出稼ぎに行ったまま父親の渡辺長松は行方不明になったと言われる。

これには「牧口（渡辺長七）が3歳の時、彼の母いねを離別し、単身樺太に渡った」<sup>2)</sup>、「3歳のころ、父の長松が出稼ぎのため北海道へわたったまま帰らず、連絡を絶ってしまった。やがて母のイネは渡辺家から離縁し」<sup>3)</sup>、「3歳になったころ、父長松は、北海道へ出稼ぎに行ったまま消息を絶ち、両親は離別＝離縁になってしまった」<sup>4)</sup>と若干、内容が変わるものの現地の伝説が語り伝えられた。高瀬広居の「旭川へ出稼ぎに行った」との伝説もある<sup>5)</sup>。

「離別」、「離縁」という言葉は離婚の意味で使われた。また、当時の女性は結婚してもすぐに入籍はされず、子供が生まれて初めて入籍されるのが一般的だった<sup>6)</sup>。牧口自身も、長女ユリが誕生した後に妻を入籍している<sup>7)</sup>。

だから子供ができないという理由だけで「離別」つまり一方的に追い出されるといふ例は多かった。しかし、渡辺長松夫妻に子供は出来たのでこれにはあてはまらない。また江戸時代から1873年（明治6年）5月まで、離婚する権利は夫側であって妻側にはなかった<sup>8)</sup>。

一方、行方不明の夫・長松が離婚を届け出たと考えることは難しく「離別したあと、樺太とか旭川へ」という各伝説には裏付ける資料はない。

また、その実父・長松と思われる人物は北海道の牧口研究者・信本俊一により北海道で発見されている。

信本によれば「北海道毎日新聞」1889年（明治22年）3月8日付に北海道の嶋牧郡一帯を襲った大雪崩に遭難した村の様子を伝える記事がある。その記事には「この年2月26日、北海道嶋牧郡歌嶋村は暴風雪の中で50年に1度という大雪崩に襲われ、民家数戸が埋没し、10数人が死傷した。だが、同村字鳩泊（におとまり）村1番地の戸主・齋藤キヨ（41歳）は母・ヨシ（72歳）、長女チセ

(16歳)とともに亡夫・渡辺長松の四十九日法要を営んでいた。近所の人々を招き徹夜念仏の最中だったが、雪崩の轟音に驚いた人々が同家を飛び出し、死傷者はここではでなかった」(趣意)(下線:筆者注)とある。

この四十九日法要の対象者が戸主・齋藤キヨの亡夫「渡辺長松」であり、記事からすると入籍はされていない。内縁関係にあったと推定される。

この日から49日をさかのほれば、「渡辺長松」が死去したのは同年1月10日前後となる。

現存する牧口家過去帳には、牧口の実父・長松が1889年(明治22年)1月10日に死去と記されている。もちろん牧口の実父・渡辺長松と同姓同名の可能性があるが、ここまで合致すれば、この齋藤キヨの内縁の夫・渡辺長松こそ、牧口の実父・渡辺長松だったと推定できる。

長松がもし正式に荒浜で妻と離婚していれば、特に内縁関係にする必要はないので、長松が荒浜の“妻”を離別したとの説の根拠はさらにうすい。

生家・渡辺家の戸籍を見ると、渡辺長七(牧口の幼名:以下、長七を牧口と呼ぶ)の出生届が父親・長松ではなく、祖父の渡辺七郎左衛門によって出され、しかもその孫として入籍されている。これは、長松が行方不明のため我が子の出生届を提出できず、やむなく祖父が孫として入籍したことをうかがわせる。出稼ぎ中だから本人が提出できない、という理由はありえない。

以上から長松が行方不明中に牧口が生誕したことが推定できる。そうすると牧口が3歳のころ長松が妻を離別し北海道や樺太に行ったとか行方不明になったとの先述の各氏の書いた伝説は事実とは異なり、牧口生誕前に北海道に渡り行方不明になった父・渡辺長松は齋藤キヨと内縁関係になり、牧口の母との離婚は正式には行われていなかったといえる。

### 3、牧口とその実母イネにまつわる伝説の検証

次に実父が家にいなかった牧口は、地元の習慣に従い母親の実家でしばらく育てられ、実父の帰りを待っていたと考えられる。

ところが前出『評伝 牧口常三郎』では、「幼子の長七は、祖父母によって

近所の人からもらい乳をして育てられたという。母との別れは生後まもなくのことである」<sup>9)</sup>としてその年譜でも「長七は祖父母に育てられる」<sup>10)</sup>と書いてある。つまり、生後間もなく母は離別され、祖父母の渡辺七郎左衛門夫妻が引き取って「もらい乳」で育てられたと判断されている。

ただ、この「もらい乳」の伝説も牧口の三男・洋三の妻が牧口の親族から伝え聞いた話であり、具体的な裏付け史料はない。あくまで伝聞である。

当時は、日本全国にもらい乳の風習があった。乳つけとか乳あわせといって赤ちゃんが生まれるとしばらくは他人のお乳をもらい育てるという風習で、それを「もらい乳」とも称した<sup>11)</sup>。それを指している可能性も否定できない。

一般庶民の間では母乳の不足に原因をもたない、子どもが生まれてはじめてのむ乳を、最初の1日だけ、あるいははじめの数日間、他人の乳であてる風習であった。

「もらい乳」をしたという伝聞だけで、生後まもなく母親・イネが牧口を手放したと考えるのは無理がある。牧口の実母でありながら、なぜ牧口から引き離したか。これが離別というなら、だれが離別したか。

行方不明の夫・長松が妻を離別するなど法的に到底できない。その説明が『評伝 牧口常三郎』には全くない。しかも「離別は牧口が3歳のころ」という多くの伝説と食い違う。

北海道に行ったまま消息不明の夫・長松を、妻のイネは渡辺家の嫁として牧口を育てながら待ち続けた可能性は現状の資料では否定できない。

だが、やはり3年待っても消息不明ならば離婚や再婚を考えても不思議ではない。1873年(明治6年)、「太政官布告」第162号、および第247号により、妻が夫を離婚する権利が初めて法的に認められた。条件のひとつは「夫が2年以上行方不明」の場合、妻が離婚を請求できるとされた。

実際、牧口が5歳の時に母親イネは荒浜の住人と再婚する。再婚した相手方(柴野家)の戸籍では、入籍が1876年(明治9年)3月8日で、その柴野家の長女が生まれたのが同じ1876年となっている。つまり、当時の慣習にしたがい、子供が出来て初めて入籍したことがわかる。

これにより事実上の結婚は1874年から1875年（明治8年）ごろではないかと推定できる。だとすれば、牧口が3～4歳のころ、実母・イネが再婚したことになる伝説と合う。但しここで再婚するためには、母親のイネが夫・長松を離別しなければならなかった。

多くの牧口伝説に、母親イネの「離別」、「離縁」という言葉が出てくるのは再婚のためにイネが逆に夫・長松を「離別」した可能性が高いというか、それしかないと考えられる。

ひとり残された3歳前後の牧口の面倒をみたのが、おそらく牧口の実の叔母（長松の妹）で渡辺家のすぐそば<sup>12)</sup>に住む牧口善太夫の妻・トリだったと考えられる。実際、牧口は離別の3年後（実母・イネの入籍の翌年）にこの牧口善太夫夫妻の養嗣子になっている<sup>13)</sup>。

この時期については、次のような悲しい伝説が生まれている。

「離別した母は幼い牧口に会いたくてたまらなかった。同情した村人が上野堂という村の御堂へ牧口を連れてゆき、母に会わせてやった。母は牧口を抱きしめて何事か語りながら、そこここを歩き回っていた。

そんなある日、日が暮れても母と子の姿が御堂に戻ってこなかった。村人たちは一瞬不吉な予感を胸によぎらせながら浜へ走った。

泡立つ波のなかへ母と子は抱き合いながら、静かに沈んでゆこうとしていた。それ以来、牧口は母と会うことは許されなくなった<sup>14)</sup>。

これはあくまで、荒浜の人々が語り継いだ伝説であり、事実がどうであったか、それを裏付ける具体的な資料がない。

聖教新聞社刊「牧口常三郎」編集にあたった当時の取材記者に確認すると、1971年（昭和46年）当時、荒浜に住む複数の人物がまったく同じ伝説を語ったことをそのまま書いたとのことだった。

牧口自身はそれに関しては一切なにも語っていない。

以上の考察により、牧口の幼少期に父が行方不明となり、さらに母とも離別した悲劇的な事実が村人に記憶され、長く語り伝えられたことが伝説となったことが見て取れる。

#### 4、小学校時代の伝説の検証

「常三郎少年は小学校に入る頃からほとんど一日中読書に過ごしていた」。

「道を歩いている時も便所へ行くときも彼は本を離さない」。

「勤勉な牧口少年の学業成績は抜群だった。親類の間でも船乗りには不向きじゃないかという声が囁かれ始めた」<sup>15)</sup>。

あるいは、「家業の廻船業を手伝うため学校に行けなかった日はその日の授業の内容を友人から、砂の上を書いてもらい教えてもらった」<sup>16)</sup>という伝説など少年時代の伝説は数多い。

しかし、こうした伝説を裏付ける史料は何も残っていない。当時の荒浜小学校にも、村にも図書館はなく<sup>17)</sup>読む本は教科書程度。しかも自宅から歩いて数分で小学校に到着した<sup>18)</sup>ので歩きながら読む時間はなかったと思われる。

だが後年、牧口に取材して書いたと考えられる「地理学に篤学の諸名士伝」で「年僅かに十三にして北海道札幌の親類に寄宿して小樽警察署の給仕として自活の道を得るに至つた。〔中略〕小樽警察署にあること四ヶ年、その間暇さへあれば読書に余念なく、勉強給仕の『ニックネーム』を得たのもしかあるべきである」<sup>19)</sup>と書かれている。文中「北海道札幌の親類に寄宿して」とあるのは、札幌に親戚がいたという記録はないので「小樽の親類」の間違いだらう。10代から読書に没頭したさまが書かれていて、この話が小学生時代の伝説に影響したとも考えられる。このような伝説は数多く残されている。

#### 5、北海道渡航時の伝説の検証（その1）

次に牧口が新潟から北海道に渡り、北海道師範学校に入学する時期の伝説を検証する。13歳<sup>20)</sup>(12歳<sup>21)</sup>、または14歳<sup>22)</sup>の説もある)のころ、牧口は北海道に渡る。牧口が北海道に渡った理由として斎藤は牧口の義父・牧口善太夫がかかわる北前船貿易の急激な衰退をあげている。大型汽船の登場、鉄道網の拡大が要因だと書いている<sup>23)</sup>。しかし、これら汽船、鉄道、通信の発達・発展は牧口の少年期より相当後の時代になる。

北前船研究者のほとんどが明らかにするように、その衰退が顕著になるのは明治20年代後半から30年代にかけてであり、それを牧口の北海道渡航の主因とするのは無理がある<sup>24)</sup>。ちなみに、神戸～小樽の北前船航路を汽船が走り始めるのは1885年（明治18年）からであり、10日に一便程度だった<sup>25)</sup>。

そうではなく、当時の日本全体を襲った松方デフレ政策による空前の不景気が牧口を北海道に向かわせた可能性が大きい。牧口が小学校の初等科、あるいは中等科を卒業したと推定される1882年（明治15年）ころ、日本全体が西南戦争の軍事費膨張から始まったインフレを押さえ込む為、政府の大蔵卿・松方正義が推進する強力なデフレ政策によって、深刻な経済不況に陥っていた<sup>26)</sup>。

当時の「新潟新聞」<sup>27)</sup>の記事によると、この1882年（明治15年）4月に新潟港に入港した船は合計でわずか125艘、例年に比べると十分の一に激減した。

例年4月から5月頃は北前船がいっせいに大阪、西日本各港を回り、交易品を満載し新潟港を経由して北海道に向かう最盛期にあっていた。その北前船との交易が重要な柱だった牧口善太夫などの新潟各港の回漕業はおそらく甚大な損害を生じ、極度な不振に陥っていたと考えられる。

さらに「荒浜村誌」<sup>28)</sup>によれば、この1884年（明治17年）～1886年（明治19年）にかけて、北海道や、荒浜方面は不漁が続き、また大不況の波も重なり漁網がほとんど売れなくなり、荒浜の漁業者はもちろん、漁網産業に働く村のおおかたの人々は失業し、飢えた人々のため製塩業が復活したと伝えている。

小学校を卒業しても家業の回漕業に仕事はなく、村の製網産業にも就職がかなわなかったことが、牧口が新天地・北海道に仕事を求めて旅立った理由である可能性は大きい。

なお、義父の回漕業が極度の不振にあった時に、下等でも6円の高額な運賃<sup>29)</sup>を支払って当時の最新の汽船に乗って小樽に行くには経済的な困難があったと思われる。だがこの当時、1883年（明治16年）から1885年まで日本海航路の三菱汽船と共同運輸は絶望的な運賃切り下げ競争をしていて無料に近い低運賃で客を運んでいたという<sup>30)</sup>。

## 6、北海道渡航時の伝説の検証（その2）

さらに、牧口が北海道を目指したもうひとつの理由は、行方不明だった実父に会うためとも考えられる。

牧口が旅立ったと推定される年から2年後の1886年（明治19年）11月2日、牧口の実父・渡辺長松はその父・渡辺七郎左衛門の死去にともない渡辺家の家督を相続している<sup>31)</sup>。

相続する人物が行方不明のまま家督相続は決して出来ない。だから少なくとも1886年（明治19年）までには、実父の居場所は関係者には知られていたと考えるのが自然である。ならば、まだ見ぬ実の父親に一度は会いたいという思いが牧口にはあった可能性がある。

小樽の叔父・渡辺四郎治がその情報を伝えたのではないかと思われるが、その叔父をたよって牧口は一人、小樽に旅立った。そこで初めて牧口は実父と義妹に会ったと考えられる。実父・長松は家族とともに嶋牧郡の海辺で海産物干し場を経営していた<sup>32)</sup>ようである。その時、実父は牧口に「同志社大学に入れたかったんだ」と述べたという<sup>33)</sup>。

さらにこの前後について次のような伝説もある。

「(牧口は) また不幸な事件に襲われたのだった。異母妹の死である。

すでに再婚していた実父親渡辺長松には女の子があった。少年（牧口のこと：筆者注）はこの異母妹の子もりを日課としていたのだが、ある日、妹を背負いながら読書に夢中になっている時、突如銃声が響き、背中で鋭い悲鳴が起こった。妹は鮮血にまみれて死んでいた。蒼白（そうはく）となってふるえる少年に、猟銃を持った政府の高官が深くうなだれた。誤射とはいえこの出来事は、新しい世界を求めてきた常三郎少年にとりあまりにも無惨な衝撃であった」<sup>34)</sup>。これは60年以上も前に、おそらく高瀬が新潟県荒浜の住人から聞いた伝説をもとに書いたと思われる記事である。この伝説の出所は明示されていない。あくまで荒浜での聞き書きであろう。

別の人物も、全くこれと同じ話を聞いたと書いている。

潮出版社刊『聞書・庶民列伝～牧口常三郎とその時代～雪炎えて』の著者・竹中労は「この伝説は、大勢の人々に信じられているのだ。私たちは荒浜村でも古老からその話を聞いた」<sup>35)</sup>とする。竹中はこの伝説を1983年(昭和58年)出版の本に書いており、少なくとも昭和50年代までも現地で広く語り伝えられた話といえる。

この伝説の最後の部分では「一説によると異母妹を誤殺した政府高官は北海道開拓使長官・黒田清隆<sup>36)</sup>だともいわれ、黒田が謝罪の意味で札幌師範<sup>37)</sup>の学資その他をもとうといったともいわれる」とあるが、これについて先述した斎藤正二は手厳しく「真実をかけ離れること夥しい」と斬って捨てる。

「まずいきなり妹なる人物が登場してきて非業の死を遂げるが、これこれの兄弟姉妹がいたけれど死んでしまったという語りくちはこの種の説話(1977年以降には合衆国渡来の“ルーツ物語”というものが日本にも流行し始めているが、血統=係類説話ということになれば中国や日本はそのもともとの本場であって江戸時代には『系図屋』と言う商売まであり、顧客の要望に応じていかようにでも拵えあげてくれたものである)の定型でしかないことに留意すべきである。はじめから存在しない妹なのだから別れの悲しさに封じ込めようが、死別させてしまおうが、話者の想像次第でどうにでも扱うことができる」<sup>38)</sup>と。

この斎藤の言いたいことはわかるが、先述したとおり牧口に妹がいたことはほぼ確定できるので、批判は当たらない。

また、斎藤は北海道開拓使長官・黒田清隆が関与したことは絶対ないと、当時の日本政界の動きから断定する。なぜならこの事件の起きたと推定される1882年～85年当時、黒田は北海道を去っていて、日本政界に起きた2つの大事件「開拓使官有物払い下げ事件」、「明治14年の政変」<sup>39)</sup>の渦中の人になっていて東京を離れることはできなかったからと指摘する<sup>40)</sup>。

これはその通りだが、斎藤論文ではさらに

「この大嘘ばなしがどうして高瀬広居のメモ帳に記載されるに至ったか、ということを考えあぐねているうち、たまたま、わたくしの手許にある海保嶺夫著『幕藩制国家と北海道～松前藩政史研究序説～』(三一書房、1978年4月)とい

う書物に教えられて、初めて謎が解けたのだが、黒田清隆は、実際に、小樽漁民の娘を撃ち殺し、しかも自分のサラリーではなしに官費で賠償しているのである」<sup>41)</sup>と書いている。

この事件の裏付け史料として海保は高島尋常高等小学校が1941年（昭和16年）に編纂刊行した「高島町史」をあげているので<sup>42)</sup>、実際にこの「高島町史」を見ると、事件は次のようなものだった。

1876年（明治9年）7月30日午前11時ごろ、黒田が乗艦した玄武丸が小樽港入港を前に、高島にあった赤岩岩礁を標的に大砲を試し打ちした。

ところが砲弾が外れ、高島郡祝津村在住の斉藤清之助の小屋に命中。たまたまその小屋にいた清之助長女・多津與の両足に当たり重傷を負わせた。

同艦にいた医師が上陸して手当てをしたが及ばず、即日死去した。

負傷の手当として50円、葬祭金50円、埋葬料40円の合計140円を黒田は渡している。

だがその出どころは、玄武丸船長から罰金100円、船監督から追徴金40円の合計140円を出させ、それをそっくり渡している。命令した黒田は一銭も支払ってない、という事件だった<sup>43)</sup>。

しかし、この事件は世に「黒田長官大砲事件」と称され、「家人の悲憤言語に絶し、後年まで語り伝えて悲痛極まりなき恨事とされた」「砲弾命中の家屋は現存（事件から約70年後まで：筆者注）」と町史に書いてあるので、おそらく小樽周辺の現地では相当有名になったと考えられる。

当時は海でつながり、荒浜からみれば隣町のような存在だった小樽の有名な「黒田長官大砲事件」は、小樽在住の荒浜出身者はもちろん、口づてに新潟・荒浜の人々に衝撃的なニュースとして伝わっていたことは想像に難くない。

確かに、「黒田清隆による牧口の異母妹誤殺」の伝説はあまりに空想的で、歴史的事実と突き合わせれば突き合わせるほどかすんでしまい、根拠が全くないことがわかる。しかし、なぜこのようなおよそ現実離れた空想そのものの衝撃の伝説が最近まで荒浜の人々に語り伝えられたのだろうか。

その理由は、牧口が北海道に移住した当時、小樽にいたとされる叔父の渡辺

四郎治に関連していることがわかってきた。

渡辺四郎治は牧口が生まれる前に、牧口の実父・渡辺長松とともに北海道に渡ったと伝えられている<sup>44)</sup>。当時、小樽に住んでいたので、牧口はこの叔父を頼りに小樽に渡ったとされる<sup>45)</sup>。

## 7、小樽の親戚で起きた悲劇と伝説

北海道・小樽で牧口は小樽警察署の給仕として働いたと考えられるが小樽警察署に牧口を推薦したのはこの叔父・渡辺四郎治と考えられる。

実際、『評伝 牧口常三郎』<sup>46)</sup>では、「彼（渡辺四郎治のこと：筆者注）は小樽郡の新地町に住んで雑業を営み、笠島紋十郎家に入出入りしていた。長男の笠島一郎は、小樽郡に4人いた総代人（住民代表）の一人で、警察署の給仕に長七（牧口のこと：筆者注）を紹介できる立場にあった」と、叔父を通じてこの笠島なる人物が牧口を警察署に紹介したと書いている。

しかし、小樽市が編集発行した『小樽市史』（昭和33年4月1日発行）によれば、1879年（明治12年）4月1日以来の小樽総代人の氏名が列挙されているうち、1880年（明治13年）現在の総代人には28人が明記され、確かにそのうち新香町関連の9人の総代人のうち1人が笠島一郎である。

しかし1881年（明治14年）6月29日現在の総代人名簿<sup>47)</sup>には、笠島の名前は消えている。さらに、牧口が小樽に移住した1884年（明治17年）か1885年（同18年）ころには、総代人は28人から、一挙に15人に減って、そこには笠島の名前は無い<sup>48)</sup>。

そして、牧口研究者の信本によれば、1883年（明治16年）3月12日、笠島は総代人を辞職している<sup>49)</sup>。だから名簿に笠島の名前がないのは当然である。

だとすれば、笠島が牧口を少なくとも総代人として小樽警察署に推挙できる立場にはなかったことになる。

この牧口の叔父・渡辺四郎治については「北海道毎日新聞」<sup>50)</sup>、「函館新聞」<sup>51)</sup>に次のような事件が報じられているのを発見した<sup>52)</sup>。

「1889年（明治22年）1月5日から6日の早朝まで小樽に猛烈な暴風雪が吹き

荒れた。そしてこの日午後3時ごろ、小樽郡役所の臨時雇いの青年が自宅の土間から銃器（鳥銃）で筋向いの隣家・田中宅の屋根に止まった鳥を撃とうとして、偶然に隣家から目の前を通りかかった子供を誤射し、死なせる事件が起きた。

被害者は加害者の隣家で小樽・新地町2に寄留し、雑業を営む新潟県刈羽郡荒浜村9番地出身の渡辺四郎治の長男（9歳）だった」という趣意の記事だった。

この記事の渡辺四郎治は牧口少年が北海道に渡航する際に頼った小樽の親戚・渡辺四郎治と同一人物の可能性が非常に大きい。年齢も住所も出身地が荒浜であることも牧口の親戚・渡辺四郎治の想定に一致する。

そしてこの記事はあくまでもこの渡辺四郎治が牧口の叔父であったとしての話だが、異母妹ではないにせよ牧口の近親者が銃器で誤殺されている事実を示している。

しかも誤殺した犯人は臨時雇いながら小樽郡役所に勤める役人だった。そしてその上司は小樽郡長（小樽警察署長兼任）で薩摩出身<sup>53)</sup>の森長保だった。

おぼろげながら、牧口の近親者の銃器による誤殺伝説が生まれた背景が浮かび上がってきた。

また、渡辺四郎治の子供を誤殺した郡役所の役人の上司・森長保は、郡長（小樽警察署長兼任）として牧口を北海道尋常師範学校に推薦した当事者だった。

この事件から2か月以内に森郡長から北海道尋常師範学校に第1種入学の推薦（薦挙書）が出され、事件から3か月後の1889年（明治22年）4月に牧口は北海道尋常師範学校にその史上初の推薦入学をする<sup>54)</sup>。

郡役所の役人に銃器で少年が誤殺されるというのは衝撃的な事件であり、数回にわたって、当時の現地新聞「北海道毎日新聞」、「函館新聞」に掲載されている。北海道の多くの人に読まれ、話題になり、特に地元の小樽では有名になったと考えられる<sup>55)</sup>。

さらに事件から5日後の1月10日に、前述のように牧口の実父・長松が死去

していると推定できる。当然、実父・長松は親戚の子供の死去を聞き、弔問か葬儀参列をしたはずで、その直後に亡くなったことになる。牧口の近親者2人がほぼ同じ時に死去という悲劇が続いた。

これらは牧口にまつわる衝撃的な事件として、ただちに海で小樽と密接につながる新潟・荒浜にも伝わったのは当然だったろう。

こうしてみると、牧口に異母妹がいたこと、近親者が郡役所の役人によって銃器で誤殺されたという衝撃的な事件、しかも牧口の郡長推薦による初の北海道尋常師範学校無試験入学、しかもたった3人のうちのひとりという衝撃のニュースが、同時に荒浜の人々に北海道から大事件として伝えられたと考えられる。

衝撃的なニュースが時期的に非常に近接しているために、語り伝えるうちに「政府高官による妹誤殺」伝説に変わっていった可能性も否定できない。

牧口の近親者が政府高官ではないが、薩摩出身の郡長がいる郡政府の役人に銃器で誤殺されたことがかなりの確実性で伝説の底流にあったことがみえてくる。

近親者誤殺事件から1か月もたない2月2日、この年4月入学の北海道尋常師範学校の生徒の募集を開始された<sup>56)</sup>が、その前年1888年(明治21年)の10月15日、北海道庁の庁令により、北海道尋常師範学校の入学希望者のうち郡区長の推薦(薦挙書提出)<sup>57)</sup>を受けた者は無試験入学(推薦入学)が許可されることになっていた<sup>58)</sup>。

牧口は北海道師範学校史上初めて無試験入学(推薦入学)することになる。

## 終わりに

以上、考察してきたこの牧口伝説だが、斎藤正二は「伝説とか民話とかいったものは、たいてい、こういったひどい嘘コーパスの集積であるほかないのだ」<sup>59)</sup>ととらえている。

しかし何の記録媒体をもたない、また何の正確な伝達手段をもつことなく明

治初年まではほとんどが文盲だった荒浜の庶民が口伝てに伝える、その地域だけの伝説には、意外な歴史的な事実も含まれる可能性があることを、数々の牧口伝説が物語っているように思われる。

牧口自身は、この時期については全くと言っていいほど、なにも書き記さず、語ってもいない。だから、今後もこうした伝説の断片のなかに牧口の幼少期、少年時代の歴史を追い求める作業が続くことになる。

追記：なお、この北海道師範学校に牧口を推薦したのは郡長兼警察署長・森長保であるが、牧口に関する伝説として「署長は早くから（牧口が）唯者でないことに目をつけて、自分が札幌に転任する時に先生（牧口のこと：筆者注）も一緒に連れて行って、札幌師範（北海道師範のこと：筆者注）に入学させることにした」（「伝記牧口先生の御一生」『大白蓮華』第12号、聖教新聞社、14頁）とある。この署長はだれか。森長保だという説が聖教新聞社刊「牧口常三郎」や斉藤正二の前掲書では書かれているが、この署長は森長保ではない。

なぜなら森は札幌に転任などしてないからである。「小樽郡治類典」（明治19年～22年）や「北海道庁職員録 明治20年5月1日調べ」（ともに北海道庁文書館）によれば森は1887年（明治20年）2月に初めて郡長として小樽に赴任（任命の発令は前年）、牧口が北海道師範学校に入学した1889年（明治22年）には小樽郡長のままだった。この伝説に適合する唯一の人物が「北海道庁職員録」（明治20年・北海道庁文書館蔵）、「小樽郡治類典」明治19年～22年（同）に記録されるように、1887年（明治20年）に札幌転勤になった森の前任署長・山田謙（小樽郡長兼任）である。

山田は1887年（明治20年）の春、札幌の北海道庁・本庁課長（用度課長）として転勤する。だから、小樽警察署にいた牧口を札幌転勤にともない一緒に連れて行った唯一の可能性をもった人物である。

## 注

- 1) 「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝 牧口常三郎～創価教育の源流 第1部』第三文明社、2017年。

- 2) 池田論『牧口常三郎』日本ソノ書房、1969年6月、23頁。
- 3) 熊谷一乗『牧口常三郎』第三文明社、1978年10月、13-14頁。
- 4) 斎藤正二『若き牧口常三郎 上』第三文明社、1981年11月、117頁。
- 5) 高瀬広居「炎の殉教者・牧口常三郎」『新潟日報』、1965年9月4日付2面。
- 6) 平凡社『世界大百科事典』第1巻、2007年9月、204頁。当時の日本の農漁村地域では「足入れ婚」といって仮の婚礼儀礼ののち女性が夫の家族に入った。また、試験的に同居しながら適応性をはかり不都合なら解消できた。
- 7) 前出『評伝 牧口常三郎』の「略年譜」471頁、および「牧口家戸籍」による。
- 8) 『太政官布告』第162号、第247号、1873年5月。これで初めて妻からの離婚請求が認められる。
- 9) 前出『評伝 牧口常三郎』16～17頁。
- 10) 前出『評伝 牧口常三郎』付録1 略年譜、470頁。
- 11) 平凡社『世界大百科辞典』第18巻、2007年9月、67頁によれば「出産直後の母乳である初乳を『新乳（あらちち）』といって捨て、かわりに他の乳児の母親から乳をもらう『乳合せ』という風習があった」。
- 12) 作者不詳「荒浜村宅地引帳」（荒浜コミュニティセンター蔵）によれば牧口善太夫所有の家は、渡辺家のその隣と斜め前に2軒あった。
- 13) 『牧口善太夫』の荒浜村戸籍による
- 14) 美坂房洋編『牧口常三郎』聖教新聞社、1972年、20頁。高瀬広居「炎の殉教者・牧口常三郎」『新潟日報』1965年9月4日付、2面。
- 15) 前出 高瀬広居「炎の殉教者・牧口常三郎」『新潟日報』、1965年9月4日付2面。熊谷一乗『牧口常三郎』第三文明社、1978年、19頁。
- 16) 前出 美坂房洋編『牧口常三郎』、23頁。前出「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝 牧口常三郎』、20頁。
- 17) 柏崎郷土資料刊行会『荒浜村誌』、1978年8月、72～73頁。荒浜小学校略図には図書館はない。
- 18) 荒浜の牧口の旧宅跡地から旧荒浜小学校まで歩いて実測した結果に基づく。
- 19) 南榎庵主人「地理学に篤学の諸名士伝」『地理学研究』第2巻第8号、地理学研究会、1925年8月、29頁。
- 20) 前出 南榎庵主人「地理学に篤学の諸名士伝」、29頁。
- 21) 前出 高瀬広居『炎の殉教者・牧口常三郎』『新潟日報』。
- 22) 前出 聖教新聞社『牧口常三郎』、26-27頁。
- 23) 前出 斎藤正二『若き牧口常三郎 上』、348～350頁。
- 24) 牧野隆信『北前船』柏書房、1964年、141～143頁。越崎宗一『北前船考』北海道出版企画センター、1972年、61～62頁。
- 25) 日本経営史研究所編『日本郵船株式会社百年史』日本郵船（株）、1988年10月。
- 26) 『明治時代史大辞典 第3巻』吉川弘文館、2000年4月、472頁。

- 27) 『新潟新聞』1882年（明治15年）5月4日付。
- 28) 前出 柏崎郷土資料刊行会編『荒浜村誌』、108頁。
- 29) 『汽車汽船 旅行案内』第1号、庚寅新誌社、1894年10月、79頁。
- 30) 岩崎弥太郎 岩崎弥之助伝記編纂会編『岩崎弥太郎伝 下』1967年、552～582頁。  
日本経営史研究所『近代日本海運生成史料』日本郵船（株）、1988年10月、167～168頁。
- 31) 荒浜村・渡辺長松の戸籍による。
- 32) 牧口研究者・信本の研究による。「明治19年 寿都嶋牧磯谷歌棄郡役所 土地所有者段別地価調書」北海道公文書館『簿書10289』。嶋牧郡で長松の内縁の妻の母名義で海産物干し場経営の記録がある。
- 33) 塩原將行「創価教育の80年～その言葉の誕生と学校設立の構想」創価教育研究所刊『創価教育』第4号、241頁。同志社大学の開学は1912年で当時まだなかった。「同志社英学校」の間違いか。
- 34) 前出 高瀬広居「炎の殉教者・牧口常三郎」『新潟日報』。
- 35) 竹中芳『闇書・庶民列伝～牧口常三郎とその時代～雪炎えて』潮出版社、1983年、107頁。
- 36) 吉川弘文館『明治時代史大辞典』2011年12月、815頁。薩摩藩出身で戊辰戦争では官軍参謀として活躍。後に日本の第2代総理大臣となる。
- 37) 山崎長吉『北海道教育史』北海道新聞社、1977年、145頁。北海道師範学校の前身、1886年に北海道師範学校になる。
- 38) 前出 斎藤正二『若き牧口常三郎 上』第三文明社、323～324頁。
- 39) 岩波書店『岩波日本史辞典』1999年、1122頁。1881年、政敵を追放し開拓使官有物払い下げ事件を取り消し薩長藩閥政府を確立した政変。
- 40) 前出 斎藤正二『若き牧口常三郎 上』第三文明社、331頁。
- 41) 前出 斎藤正二『若き牧口常三郎 上』第三文明社、332頁。
- 42) 海保嶺夫『幕藩制国家と北海道～松前藩政史研究序説～』三一書房、1978年4月、306頁。
- 43) 高島尋常高等小学校編纂『高島町史』、1941年8月、245頁～247頁。
- 44) 「渡辺家系図」（渡辺本家）渡辺本家からの聞き書きによる。
- 45) 「伝記 牧口先生の御一生」『大白蓮華』第12号、聖教新聞社、14頁。
- 46) 前出『評伝 牧口常三郎』、31頁。
- 47) 「明治13年現在、14年6月29日現在の総代人名簿」小樽市編『小樽市史』、1958年、346頁。
- 48) 前出「明治18年10月現在総代人名簿」小樽市編『小樽市史』、347頁。
- 49) 『札幌県治類典 総代人 自明治15年4月至同16年5月』北海道庁公文書館（簿書8028）。
- 50) 『北海道毎日新聞』1889年（明治22年）1月8日付、同2月9日付。

- 51) 『函館新聞』1889年（明治22年）1月22日付。
- 52) 牧口研究者・信本俊一も同じ記事をすでに発見していたことを2017年に確認した。
- 53) 荒浜を始め、新潟県の人々にとって、“薩摩藩”とはあの北越戊辰戦争で河合継之助率いる越後・長岡藩を倒し、多くの新潟県人を殺した新政府軍の中核であり、その戦争を指揮した新政府軍参謀が黒田清隆だった。小樽の薩摩出身の郡長・森長保と黒田清隆がダブってみえる背景が無きにしてもあらずである。
- 54) 山崎長吉『人間教育を拓く～北海道の牧口常三郎』第三文明社、1989年、85～86頁。
- 55) 事件が起きたのが正月松の内の土曜日の午後3時過ぎとすれば牧口もちょうど正月松の内休暇で叔父の家（すなわち加害者の隣家）に遊びに来ていて、その目前で事件に遭遇した可能性がある。
- 56) 『北海道毎日新聞』1889年（明治22年）2月5日付。
- 57) 北海道教育会『北海道教育雑誌』第5号、1893年2月、91～92頁。
- 58) 『北海道毎日新聞』1889年（明治22年）1月13日付。北海道札幌師範学校編『北海道札幌師範学校五十年史』1936年、9頁、239頁、242頁。
- 59) 前掲書 斎藤正二『若き牧口常三郎 上』332頁。

#### 主な参考資料・参考文献

- 池田諭『牧口常三郎』日本ソノ書房、1969年6月。
- 岩崎弥太郎 岩崎弥之助伝記編纂会編『岩崎弥太郎伝 下』1967年12月。
- 越崎宗一『北前船考』北海道出版企画センター、1972年11月。
- 小樽市編『小樽市史 第1巻』1958年4月。
- 『小樽郡治類典 任免 明治19年自1月至12月』北海道庁文書館。
- 柏崎郷土資料刊行会『荒浜村誌』1978年8月。
- 海保嶺夫『幕藩制国家と北海道～松前藩政史研究序説～』三一書房、1978年4月。
- 熊谷一乗『牧口常三郎』第三文明社、1978年10月。
- 斎藤正二『若き牧口常三郎 上』第三文明社、1981年11月。
- 札幌県庶務課『明治18年 自1月至12月 札幌縣治類典 任免 課雇給仕小使 郡区役所雇小使等』北海道庁文書館。
- 「伝記 牧口先生の御一生」『大白蓮華』第12号、聖教新聞社、1950年。
- 「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝 牧口常三郎 創価教育の源流 第1部』第三文明社、2017年6月。
- 高島尋常高等小学校編纂『高島町史』、1941年8月。
- 高瀬広居「炎の殉教者・牧口常三郎」『新潟日報』、1965年9月4日付。
- 竹中勞『聞書・庶民列伝 牧口常三郎とその時代・雪炎えて 1』潮出版社、1983年、

11月。

南榎庵主人「地理学に篤学の諸名士伝」『地理学研究』第2巻第8号、1928年8月。

『新潟新聞』1882年5月からの各号。

新潟県教育委員会『新潟県教育百年史 明治編』新潟県教育庁、1970年。

日本経営史研究所編『日本郵船株式会社百年史』日本郵船（株）、1988年10月。

日本経営史研究所『近代日本海運生成史料』日本郵船（株）、1988年10月。

『函館新聞』1889年の1月からの各号。

函館県記録係『明治19年 寿都嶋牧磯谷歌棄郡役所 土地所有者段別地価調査』北海道庁文書館。

畠中惣治郎著『帝都紳士淑女列伝』帝都彰行社、1929年。

彦根正三編『改正官員録 乙』博公書院、1887年。

『北海道庁職員録 明治20年5月1日調』北海道庁文書館。

『北海道毎日新聞』1889年1月からの各号。

北海道教育会『北海道教育雑誌』1893年第5号からの各号。

北海道札幌師範学校編『北海道札幌師範学校創立満四十年記念録』1926年9月。

北海道札幌師範学校編『北海道札幌師範学校五十年史』1936年7月。

「牧口常三郎」履歴書（北海道教育大学所蔵）。

牧野隆信『北前船』柏書房、1964年9月。

美坂房洋編『牧口常三郎』聖教新聞社、1972年11月。

文部省『文部省令第十号』、1886年5月28日。

山崎長吉『北海道教育史』北海道新聞社、1977年6月。

山崎長吉『人間教育を拓く～北海道の牧口常三郎』第三文明社、1989年。

若井絹夫「牧口常三郎の生家に関する考察」『創価教育研究』第2号、創価教育研究センター、2003年。

